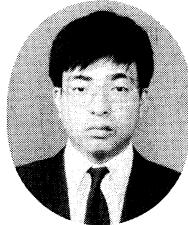


子ども

—自分を写し出す鏡—

小野敏幸



「そんな大きな声で言わなくてもいい
じゃないか」
「なんだつて」

と再びK君も言い返し、二人はあつと
いう間に大きな声で、言い争いを始め
ました。

そんな光景を見ていた私は、子ども
とはいみつともないな、と思いまし
た。しかし、次の瞬間、がく然として
しまいました。その時私は、K君とS
君の中に、まぎれもない自分自身の姿
を見い出したからです。

子どもは、担任の人柄を正直に反映
するのだと、その時思いました。担
任の言動は、子どもの言動に大きな影
響を与えるものであり、子どもの姿は、
そのまま担任自身の姿のように思えて
なりません。

例えば、教師がだらけていたり、氣
持ちがしづんでいて余裕がなかつたり
する時、子どもは教師の意図したよう
には動きません。それどころか逆に子
どもの言動にふりまわされてしまいが
ちです。こうなると、必要以上に子ど
ものなにげないひと言が気になつたり、
いらいらして大声で子どもをしかつて
みたりして、ますます子どもの心はは
なれていつてしまします。

反対に、教師が心から子どものこと
を思い、はつらつとして余裕を持つて
子どもに接する時、子どもは比較的教
師の意図したように動くようです。こ
うなると、子どもの言動もよい意味に
受け取れるし、大声で子どもをしかる
「静かにしろ」と言っています。たまちS君が言い返
します。

こともなく、学級のふんい気はとても
よくなるように思います。まさに、子
どもは教師自身の鏡なのだなあと
いう気がします。

人は鏡を見て化粧をしたり、身だし
なみを整えたりします。自分もまた、
絶えず子どもという鏡を見て、教師と
しての心の身だしなみを整えていかな
ければならないと思います。

教職三年目を迎えて、こんなことを
考へながら、子どもに接している今日
このごろです。
(石川町立中谷第一小学校教諭)

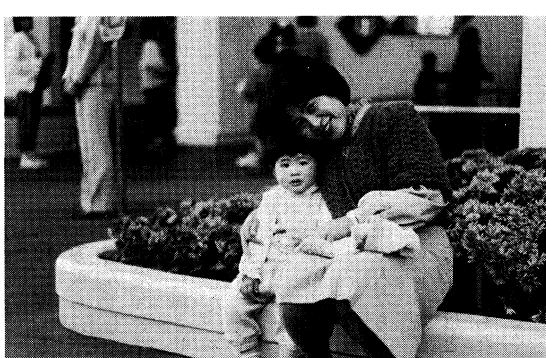
雪うさぎ

竹之下道子



「道子さん、すぐ帰りますか? ちょ
っと上がって下さい。見せたい物があ
ります」

娘を迎えて行った私に笑顔でそう言
うなりキミはあちゃん(娘を預かつて
くれている子守さんで、また私たち夫婦



▲愛ちゃんといっしょに……

の仲人さんは、台所の冷蔵庫の戸を
パタンと閉めると両手になにか大切そ
うに乗せて来ました。
それは、白い大きな西洋皿の上にち
よこんとすわっている雪うさぎでした。
赤い南天の実が、まるで本物のうさぎ
の目のように愛らしく、南天の葉の二
つの耳は、今にも取れそうに見えまし
たが、鮮やかな緑色は、うさぎの白い
体をくつきり浮き立たせました。
蛍光燈の光に照らされながら、キラ
キラ光る雪うさぎは、キミばあちゃん
と娘の愛が一緒に作つたもので、午前
十時ごろから私の帰りを冷蔵庫の中で
ずっと待つていたということでした。
時計が、七時をかなりまわつていま
したので、心からのお礼を言い、娘を